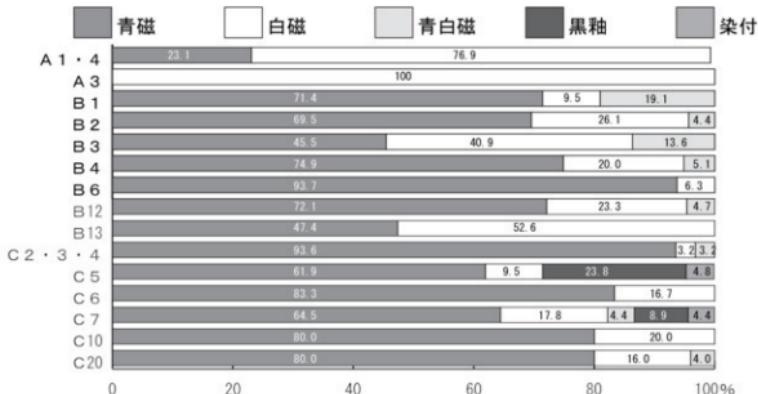


第6図 中国製陶磁器分布



第7図 中国製陶磁器種類構成

中世土師器の構成比も高まることとなる。中世前半では経営主体となる建物群が所在するB4・13地区が消費の中心となる。中世後半ではC5・7地区での集中的な出土が際だち、墓壙・宗教施設との関連が窺われる。

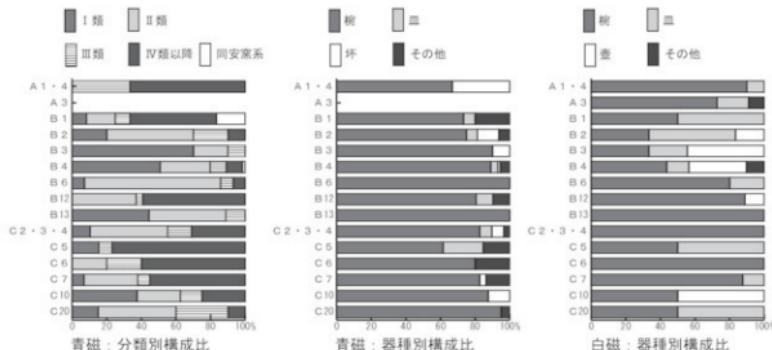
②珠洲・八尾は中世前半から後半にかけて比率が低くなる。珠洲については、中世後半においてC5・7地区での比率が低く、それを除くと比率の低下はわずかとなり、調理・貯蔵具として一定量が存在したと考えられる。八尾は、その所産時期が中世前半にあり、後半で比率は自ずと低下する。

③八尾の比率は中世前半が主体となる地区的平均で10%に満たない。しかし、A1・4、B1、C20地区では比率が高く、その背景に河川を利用した物流が行なわれていたことが推測される。

④中国製陶器は、中世前半ではB1・3・4地区などで多く保有された様相が窺える。その内容は、青磁では龍泉窯系青磁I類が多く、白磁の容器類や青白磁の出土が目立つ特徴を持つ。また、中世前半のA1・3・4、B13地区では白磁の比率が高い点が指摘できる。A1・3・4、B13地区での白磁はII・IV・V類を主とし、大宰府編年の標識磁器としては、龍泉窯系青磁I類よりも先行することが指摘されている（山本2000）。このことから、A1・3・4、B13地区の建物群の初現を、他の地区よりも早い段階として考えることも可能であろう。ただし、珠洲や中世土師器の年代観では大差なく、所有する中国製陶器の内容に違いが生じた他の要因を考える必要もある。

⑤瀬戸美濃は後期・大塞期の製品が多いため、中世後半に主体を持つ地区でやや出土が多い傾向がある。前期・中期の製品は、B1・4・13地区など中世前半の建物群が多い地区との関連が強い。経営主体者は、施釉陶磁器として瀬戸美濃も所有していたと考えられるが、中国製陶磁器よりも少ない割合であった。

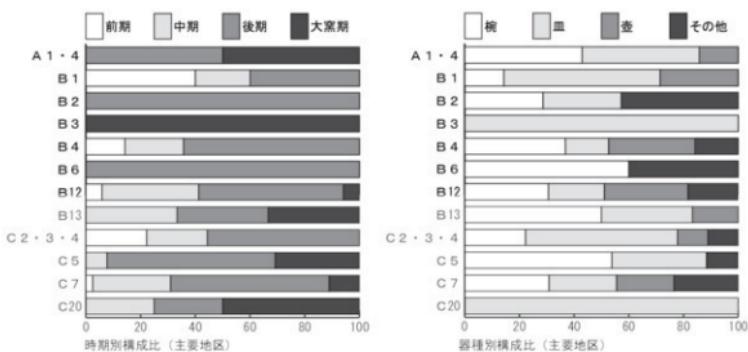
⑥瓦質土器では、中世後半のC7地区での量・器種の豊富さが注目される。特に花瓶・香炉については、瀬戸美濃後期の製品でも確認されており、土器以外では青銅製燭台が出土するなど、宗教的な色彩が濃い。C7地区の南東側は中世に存在したとされる任海池原寺跡に比定されている。こうした立地が遺構・遺物にみられる特徴に現われている可能性が高い。



第8図 中国製陶器：分類・器種構成



第9図 瀬戸美濃・瓦質土器分布



第10図 瀬戸美濃時期・器種構成

(3) 周辺遺跡の様相

任海宮田遺跡周辺には、南側に位置する県総合運動公園内遺跡群(富山県埋蔵文化財センター1990・1991・1993・1994)や、神通川を挟んだ対岸に所在する中名I~VI・道場I遺跡など(富山県文化振興財团2002・2003・2004・2005、婦中町教育委員会1995・1996)で、中世集落の調査が行なわれている。ここでは、これらの遺跡における中世での集落の消長や、土器組成を概観し、任海宮田遺跡を含めた周辺地域での中世集落の動態を確認しておきたい。

神通川右岸								神通川左岸							
百瀬宮田	吉倉A	吉倉B	南中田A	南中田C	南中田D	任海鍊倉	栗山権原	坂I	清水島II	持田I	中名II	中名I-VI	中名V+VI	道場I	
12世紀															
13世紀		■	■	■						■					
14世紀	■									■					
15世紀					■						■				
16世紀								■				■			

表1 周辺遺跡の消長



第11図 周辺遺跡の位置

- 1 任海宮田遺跡 2 吉倉B遺跡 3 南中田C遺跡 4 吉倉A遺跡 5 任海鍊倉遺跡 6 南中田D遺跡
- 7 南中田A遺跡 8 栗山権原 9 友松遺跡 10 坂I遺跡 11 清水島II遺跡 12 持田I遺跡 13 中名II遺跡
- 14 中名I遺跡 15 中名V遺跡 16 中名VI遺跡 17 道場I遺跡

A 遺跡の消長

任海宮田遺跡と周辺遺跡における中世集落は、一部が12世紀代に形成が開始されるが、概ね13世紀以降に活発な開発が進められる。

神通川右岸で熊野川との間に展開する任海宮田遺跡と県総合運動公園内遺跡群は、その多くが13～14世紀代に主体を持ち、15世紀以降は縮小する傾向にある。任海宮田遺跡の一部や、南中田D遺跡において15世紀代の集落がわずかに確認されている。

神通川左岸の遺跡群では、13～14世紀代に大型の建物を中心とした集落が形成され、その後、建物規模は縮小しつつも集落が存続していく様子が窺える。中世後半には中名II遺跡や持田I遺跡で、溝に区画された屋敷地が確認される。道場I遺跡も13～15世紀代まで存続し、河川を利用した物流拠点としての性格が指摘されている。清水島II遺跡では14世紀以降、中世後半にかけて墓域が形成されている。

以上のように、神通側の両岸に展開する中世の遺跡群は、その出現と展開の時期や、その後の集落縮小していくあり方は概ね同様である。しかし、中世後半以降では任海宮田遺跡を含む右岸側の遺跡群が衰退する傾向が窺える。

B 土器組成

任海宮田遺跡と周辺遺跡について、土器組成が把握できる遺跡について示す（第12図）。

各遺跡の地区では、存続時期や建物群など遺構の様相が一様でない。ここでは、そうした多様なあり方を示す土器組成を、いくつかの類型に分けて示しておきたい。

a：中世前半集落の土器組成

中世前半としては13～14世紀を主体と考え、任海宮田遺跡B4・13、C10地区の組成を挙げる。

任海宮田遺跡B4・13地区では中世土師器が半数を占め、珠洲が約30%、八尾が約6%となる。供膳具：調理・貯蔵具はB4地区で63：37、B13地区で58：42の比率となる。供膳具の中世土師器：中国：瀬戸美濃による構成比は、B4地区で85：14：1、B13地区で88：9：3となる。

任海宮田遺跡C10地区では中世土師器と珠洲がそれぞれ40%程度となり、中世土師器の比率がやや低くなる。八尾は4.4%と、B4・13地区と大きな違いはない。供膳具：調理・貯蔵具は52：48、供膳具内の中世土師器：中国：瀬戸美濃=81：7：2となる。

この様に、同様の時期に建物群が形成される調査地だが、その土器組成にはやや違いが生じている。

中世土師器の消費は任海宮田遺跡C10地区→任海宮田遺跡B4・13地区の順で多くなる。それと同時に、供膳具：調理・貯蔵具の構成比における供膳具の値と、供膳具内における中世土師器の比率も大きくなる。逆に中国製陶器の比率はわずかに下がっていく。

ここでは、明瞭な特徴として中世土師器の比率の違いを指摘できよう。任海宮田遺跡B4・13地区では遺構変遷でも見たように、当該期の建物群でも大型建物を含む中核的な位置にある。そのことが中世土師器の比率を高めたことと相関があるものと考えられる。中世においては、「同一の地域・時期であれば、格上の遺跡あるいは地区の方が、土器食膳具の比率が高い」（宇野1997）とされる。そのことを踏まえれば、B4・13地区の優位性が土器組成に反映されていると考えられる。

b：中世全般（13～15世紀代）集落の土器組成

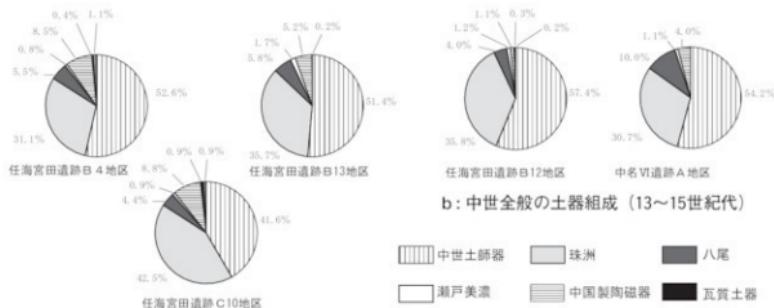
ここでは、13～15世紀代の期間に多くの遺構・遺物が確認される地区を示しておきたい。任海宮田遺跡および周辺遺跡では、16世紀代以降の様相が不明瞭な点が多く、概ね中世全般の内容を反映している地区としておきたい。任海宮田遺跡B12地区と中名VI遺跡A地区を挙げておく。

八尾・中国製陶磁器・瀬戸美濃の比率に違いはあるが、中世土師器と珠洲の比率は近似する。供膳具・調理・貯蔵具の比率は、両地区ともに60:40となる。供膳具内の中世土師器：中国：瀬戸美濃による構成比は、任海宮田遺跡B12地区で96:2:2、中名VI遺跡A地区で91:7:2となる。

土器組成に大きな相違点はないが、中名VI遺跡A地区の構成比では中国製陶磁器が高く、中世土師器がわずかに低い。両地区の建物規模を比較すると、任海宮田遺跡B12地区では100m²以上の面積規模の建物が存続するのに対し、中名VI遺跡A地区ではそうしたクラスの建物は確認できない。こうした建物規模の違いが、先に示したような中世土師器の消費における多寡に反映した可能性がある。
c: 中世後半集落の土器組成

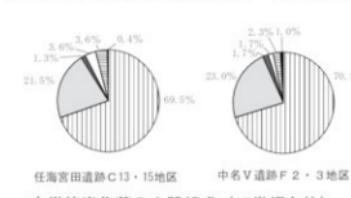
主に15世紀代に主体を持つと思われる地区で、任海宮田遺跡C13・15地区と中名V遺跡F2・3地区を挙げる。

共に中世土師器が70%前後、珠洲が20%余りとなり、同様の土器組成を示す。また、瓦質土器もわずかであるが、一定量が含まれている。当該期の建物規模は両地区ともに、それまでよりも縮小化し、大差ない。この様に、建物と土器組成ともに均質であると言えよう。

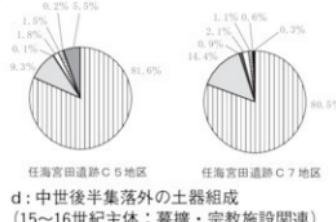


a: 中世前半集落の土器組成（13～14世紀主体）

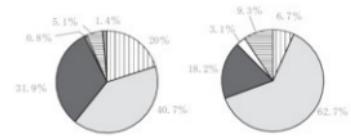
b: 中世全般の土器組成（13～15世紀代）



c: 中世後半集落の土器組成（15世紀主体）



d: 中世後半集落外の土器組成（15～16世紀主体：墓壇・宗教施設関連）



e: 河道隣接地区的土器組成

第12図 任海宮田遺跡と周辺遺跡の土器組成

d：中世後半集落外の土器組成

15世紀代を中心としつつ、14世紀後半から16世紀代までの期間、密集する土坑群が形成され続けた任海宮田遺跡C5・7地区を示す。先述の通り土坑群には墓壙を含む可能性があり、またC7地区は宗教施設の周辺に位置し、関連が強いことが窺える。

土器組成では中世土師器が80%余りを示すことが共通する。このため、他の種類についての比率は低くなる。供膳具：調理・貯蔵具の比率はC5地区で90：10、C7地区で84：16となる。供膳具の中世土師器：中国：瀬戸美濃の構成比では、C5地区は96：2：2、C7地区は98：1：1となる。両地区共に中世土師器の量が多く、供膳具の比率や、供膳具内の中世土師器の比率を押し上げている。また、供膳具内の中国と瀬戸美濃が同率となり、拮抗している。ただし、種類別構成比でのC7地区における瀬戸美濃の比率は中国よりも高く、これは瀬戸美濃に壺などの容器類や花瓶・香炉などの器種が含まれるからである。また、C7地区では瓦質土器、C5地区では羽口からなる土製品が含まれている。このことから、一見すると同様の土器組成を示す両地区であるが、いくつかの相違点が指摘できる。

e：河道隣接地区の土器組成

河道に隣接し、それを利用した物資の集散あるいは一時的な保管・貯蔵に関連すると考えられる地区である。任海宮田遺跡B1、C20地区と道場I遺跡A地区を挙げる。時期は任海宮田遺跡B1、C20地区が13～14世紀代を主体とし、道場I遺跡A地区では13～15世紀代までと存続期間に違いがある。また、任海宮田遺跡B1地区では倉庫的な役割を持つような遺構は確認されず、道場I遺跡A地区は区割りを持った複数の屋敷地が整然と形成されるなど、相違点も多く、概には比較しにくい側面もある。

任海宮田遺跡B1地区では、種類別構成で中世土師器が6.7%と低く、珠洲が62.7%と高い。また、八尾の比率も比較的高くなり、これにより供膳具：調理・貯蔵具は19：81となる。また、供膳具の中世土師器：中国：瀬戸美濃は、35：49：16で構成される。調理・貯蔵具における珠洲：八尾は、77：23となる。

任海宮田遺跡C20地区では八尾が31.9%と高い割合を占める。供膳具：調理・貯蔵具は26：74、供膳具は中世土師器：中国：瀬戸美濃=78：19：3で構成される。調理・貯蔵具では珠洲：八尾=56：44となる。

道場I遺跡A地区では中世土師器は46.9%ある。珠洲は29.1%と低く、八尾は20.4%と高い比率を示す。供膳具：調理・貯蔵具は50：50と拮抗し、供膳具は中世土師器：中国：瀬戸美濃=93：3：4で構成される。調理・貯蔵具における珠洲：八尾は、59：41となる。

この様な土器組成からは、まず種類別構成における八尾あるいは珠洲の比率が高い点が分かる。任海宮田遺跡C20地区と道場I遺跡A地区では、八尾の比率が高く、珠洲よりも若干少ないものの、一定量が存在する。任海宮田遺跡B1地区では八尾も比較的高いものの、珠洲の割合が大きい。いずれにしても供膳具よりも調理・貯蔵具の存在が目立つ。こうした中、道場I遺跡A地区においては、供膳具内では中世土師器が多くを示す。これは道場I遺跡A地区では、他の2地区に比べ建物群も多く、南半部を中心に多くの中世土師器が消費されているからであろう。また、任海宮田遺跡C20地区においても、規模は不明であるが桁行8間となる建物が確認されており、そうした中核的な建物の存在が中世土師器の比率をやや高めていると思われる。なお、道場I遺跡A地区では中国・瀬戸美濃・瓦質土器なども豊富な内容であることが指摘されており、先述した様に他の2地区と安易な比較

はしにくい面もある。ここでは、物資の集散に関わる地区において、調理・貯蔵具の比率が高く、特に八尾が搬入される特徴があることを確認しておきたい。

(4)まとめ

以上のように任海宮田遺跡における中世集落の動態を追ってきた。

任海宮田遺跡において、古代末期の空白期間を置き、早くは12世紀後半以降に形成され始めた集落は、13~14世紀代にかけて広範囲に展開する。その中には、建物規模や遺物の様相から經營の中心となる存在が、遺跡の東西にあったことが窺える。また、そうした經營主体の建物群に隣接して河道を利用した物資集散に関連する地区が存在する。15世紀以降は建物群の範囲・規模は縮小化し、土器組成も均質化していくが、一部には墓壙群形成や宗教施設に関連する特異な様相が認められる。

任海宮田遺跡近辺や神通川対岸の遺跡群においても、同様の趨勢を窺うことが出来たが、中世後半代では後者における集落が、任海宮田遺跡に比べ存続期間が長い印象を受ける。

こうした中世段階において、当該地域で確認される中世集落を考える上で、徳大寺家領宮河荘の存在を看過することは出来ない。

徳大寺家領宮河荘については、その成立過程や範囲など明かでない点が多い。寄進地形の莊園で、鶴坂神社がその成立に関わった可能性が指摘されている(久保1996)。史料としては文和三(1354)年の足利義詮御判御教書案が最も古く、その中で守護使不入権を得ている。また、明徳二年(1391)には役夫工米以下諸公事が免除されている。その後、応永二十四年(1417)に宮河荘は徳大寺家雜掌に一円沙汰付けされ、天文二年(1533年)には徳大寺家当知行目録に宮川荘の名がある。この様に11世紀末~12世紀頃の院政期以降、16世紀前半まで存続していた可能性がある。

この宮河荘には任海宮田遺跡を始め、その周辺や神通川左岸の旧婦中町域で確認される中世集落が含まれると考えられている。今回見たように、これらの中世集落が形成されるのは、推測される宮河荘の成立期よりは時期が下る。莊園内の更なる開発を目的として、各遺跡が所在する地点に進出してきたと考えられよう。その内容は均一という訳でなく、經營の中核的な役割を持つ建物群や、莊城内外の物資集散を果たす施設等の性格があったことが窺える。いずれにせよ14世紀代前半までは多くの建物群を有し、經營を進めていたこれらの遺跡群では、14世紀後半以降は集落規模が縮小傾向にある。しかし、15世紀代を前後して任海宮田遺跡では墓壙群や宗教施設に関連する様相が認められ、道場I遺跡A地区では区画された屋敷地が存続している。また、先述したように14世紀後半以降、宮河荘では守護使不入権を得るなどして既得権益の保護に努めている。守護方からの収奪の対象として認識されていたものと評価するならば、ある程度の生産力は維持されていた可能性を示唆している。

この様に任海宮田遺跡は、おそらく宮河荘の領域内に点在していた中世集落の一つで、その建物規模や出土遺物の内容からは、神通川右岸側において經營の中心的な役割を担っていたと考えられる。なお、任海宮田遺跡の北側に隣接する友杉遺跡においては、回転台成形の中世土師器が多く出土する地点があるなど、任海宮田遺跡よりも中世集落の初現がやや古い様相が一部に窺える。当該地域の中世集落の動態を考えていくにあたっては、そうした内容も含め、もう少し広い範囲での検討が今後必要になると考えられる。そうした作業を踏まえた上で、任海宮田遺跡の位置付けを改めて行なうことが求められよう。

(青山 晃)

参考文献

- 青山 晃 2007「3 中世建物変遷」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財团
- 宇野隆夫 1997「中世食器様式が意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』
- 久保尚文 1996「第三章婦中の中世 第一節古代から中世へ」『婦中町史 通史編』婦中町
- 富山県埋蔵文化財センター 1990『栗山椿原遺跡 南中田遺跡 任海鎌倉遺跡 南中田C遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1991『富山県富山市 南中田D遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)任海遺跡 吉倉A遺跡 吉倉B遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1994『吉倉B遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998『富山県 任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 富山県文化振興財团 2002『清水鳥I遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－』
- 富山県文化振興財团 2003『中名I・V遺跡発掘調査報告－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－』
- 富山県文化振興財团 2004『道場I・II遺跡発掘調査報告－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ－』
- 富山県文化振興財团 2005『中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ－』
- 富山県文化振興財团 2006『任海宮田遺跡発掘調査報告I－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VI－』
- 富山市教育委員会 1999『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書－市道西荒屋新保線道路改良工事に伴う発掘調査－』
- 中村亮仁 2006「1.任海宮田遺跡A地区出土の中世土器・陶磁器組成について」『任海宮田遺跡発掘調査報告I』富山県文化振興財团
- 婦中町教育委員会 1995『富山県婦中町中名II遺跡発掘調査報告』
- 婦中町教育委員会 1996『富山県婦中町堀I遺跡発掘調査報告』
- 森 隆 2007「8 中世の土器・陶磁器組成」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財团
- 山本信夫 2000『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

3 任海宮田遺跡の古環境復元

はじめに

富山県における遺跡の動態を概観した場合に、河川の流れが緩やかになり、流路が蛇行する下流域（氾濫原域）では弥生時代から遺跡の展開が認められているのに対して、中流域の扇状地域では古代になってようやく進出する傾向にある。任海宮田遺跡は富山平野の中ほど、神通川と熊野川によって形成された複合扇状地上に立地する遺跡である。古代になって扇状地に進出してきた新規開発型の開墾村落で、農業を主な生産基盤としていたと考えられる。近隣には吉倉B遺跡、南中田D遺跡、友杉遺跡などが分布し、任海宮田遺跡と同様に古代に急成長した集落遺跡である。

任海宮田遺跡では既刊の報告書で古環境の復元や農耕の推定を目的に自然科学分析が行われ、データの蓄積がなされてきた。小論ではこれらのデータをもとに、発掘調査の知見も合わせて、任海宮田遺跡の古環境や農耕について推定すること目的とする。ただし、取り扱う資料は分析の目的や種類、方法や試料、分析機関などそれぞれ異なるため、まず、各報告書単位で分析結果を概観し、これらのデータをもとに、古環境復元や農耕の推定について述べる。なお、各報告文中の古環境や農耕の推定において、筆者の解釈と異なる部分がある。これは各分析機関が提示したデータをもとにして、発掘調査の成果も含め筆者なりの解釈をおこなっただけであって、データそのものを否定するものではないことを断つておく。

（1）各地区の資料

資料は、任海宮田遺跡の各地区でおこなわれた花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体分析・樹種同定分析のデータである。分析試料や分析項目は表1-1・2にまとめた。任海宮田遺跡は大きくはいわゆる扇状地砂礫の上に立地しており、遺構が検出される基盤層は地点ごとに異なるが概ね砂礫または砂が基本である。このため、水はけが非常によく、好酸化的な状態で有機物が遺存しにくい環境であったと考えられる。このため、花粉遺体などは遺存状態が良好でないことが多く、種実遺体や木材のほとんどが炭化した状態で遺存していた。

以下に、報告書に示されている地区単位で、その概要を概観する。

① CS 地区^[註1]

【花粉分析】【植物珪酸体分析】試料は近世の水田層（試料1～3）と古代から中世の水田層（試料4）の4点である。花粉分析では花粉の含有率が著しく低く、良好なデータは得られていない。植物珪酸体分析では試料3でイネ属が高い数値であり、他にタケア科、ヨシ属、ウシクサ族などが伴う。

② F 地区^[註2]

【花粉分析】【植物珪酸体分析】試料はSX-01埋積土であり、時期は試料1で中近世、試料2で奈良時代である。花粉分析では花粉の遺存状態が全体的に良好でない。試料2では花粉の草本のタンボボア科、ナデシコ科、イネ科が比較的多く検出される。【植物珪酸体分析】試料2でイネ属が優占し、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族などが伴う。

③ D 地区^[註3]

【花粉分析】【植物珪酸体分析】試料はSD-02～03・05の溝埋積土であり、試料1で近世、試料4で中世の時期である。花粉分析では花粉遺体の遺存状態が絶じて良好でない。植物珪酸体分析では遺存状態が良くないものの、試料2でイネ属、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族などが出現している。

④ I 地区^{註4)}

【花粉分析】【植物珪酸体分析】河道堆積物で実施している。花粉分析は3層（試料番号3）、10層（試料番号5）、11層（試料番号6）、11b層（試料番号8）、13層（試料番号9）で行われた。河道は奈良時代には既に存在し、平安時代に入って短期間で埋没している。奈良時代の遺物が出土している13層からは花粉遺体は検出されていない。3層については木本の占める割合が草本よりも高い状況である。木本の中でもマツ属、スギ属が多く、次ぎにブナ属、ニレ属－ケヤキ属が続いている。草本ではイネ科が優占し、他にカヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属などが出現している。カキ属がわずかに認められることから栽培されていたと考えられる。10層では木本と草本の占める割合はほぼ同じである。木本ではマツ属、スギ属、ニレ属－ケヤキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属がやや高い出現率を示している。草本ではイネ科が優占し、他にカヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属などが出現している。11層では木本の占める割合が草本よりも高い。木本ではマツ属、ブナ属がやや高い出現率を示しており、他にスギ属、モミ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属などが検出されている。草本ではイネ科が優占し、他にカヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属などが出現している。また、第2地点の耕作関連と考えられている方形区画溝では木本が草本に比べてやや高い割合を示している。木本ではウコギ科が優占し、クリ属、アカメガシワ属がづく。他にマツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属がみられる。草本ではイネ科、ヨモギ属が出現している。【植物珪酸体分析】第3地点の3層（試料番号3）、11b層（試料番号8）、13層（試料番号9）と第2地点（試料番号4、5、9）で実施されている。第2地点（耕作関連と考えられている方形区画溝）の試料番号5、9ではタケ亜科が多く、ウシクサ族、ヨシ属、キビ族、イチゴツナギ亜科が出現している。栽培植物のイネ属もわずかに検出された。第3地点では概ねタケ亜科、イネ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科が出現している。

⑤ B 地区^{註5)}

・B1地区：【樹種同定】中世の土坑出土の炭化材2点について実施している。その結果、ケヤキと散孔材に同定されている。

・B2地区：【樹種同定】を堅穴建物（古代）・土坑・不明遺構（中世）から出土した炭化材4点について実施している。古代の堅穴建物SI08ではコナラ属クスギ節が同定されている。中世の土坑SK264ではヤマグワが、SD032の溝ではカバノキ属が、不明遺構SX20ではカバノキ属がそれぞれ同定されている。

・B6地区：【植物珪酸体分析】すべて古代の遺構覆土の試料である。その結果、いずれの試料からもイネが検出されている。SK1177やSK1261・SK1208などではイネがやや高い出現率を示している。SI22のカマドについては少量検出されている。イネ以外ではススキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量検出されている。【種実同定】古代の遺構から得られたもので、SK1353とSI13-1カマド内からイネの炭化果実がそれぞれ検出されている。【樹種同定】主に古代の遺構から出土した炭化材について実施している。古代からみていくと土師器焼成遺構では3点について実施し、ケンボナシ属、クリ、ブナ属がそれぞれ同定されている。また、周辺の包含層では15点について実施し、その結果、クリが最も多く5点、次にコナラ属コナラ節、ヒサカキ属、散孔材では各2点ずつが同定されて

いる。他にコナラ属アカガシ亜属、カエデ属、アカメガシワ、ブナ科が同定された。これらの樹種は基本的には土師器焼成時に薪材として遺跡周辺から供給されてと考えられる。次ぎに堅穴建物のカマドや炭範囲内からはスギ?とクリの2点が確認されており、カマドや炭範囲以外からは、カエデ属2点、コナラ属クヌギ節1点、ケヤキ1点、クリ1点が確認されている。カマドや炭範囲内から出土したスギ?とクリは煮炊の時に燃料材として持ち込まれたものと考えられる。土坑からはクリ1点、カエデ属1点、スギ1点が、溝からはクリ3点、コナラ属コナラ節1点、コナラ属アカガシ亜属1点、ユズリハ属1点、カエデ属1点がそれぞれ同定されている。中世ではSK0434やSX069からコナラ属コナラ節2点とコナラ属クヌギ節2点がそれぞれ同定されている。

・B10地区：【種実同定】中世とみられる遺構SK0518から検出された。イネの炭化果実の他に、コムギ・オオムギなどのムギ類の炭化果実が得られた。

・B12地区：【花粉分析】中世のSD158で実施している。花粉密度が少ないが、樹木より草本が卓越していることから、周辺には森林は少なく、孤立木程度であったと考えられる。草本ではイネ科・アブラナ科、タンボボ亜科、ヨモギ属などが検出されていることから、やや乾燥した日当たりの良い環境が推定されている。また、虫媒花のアブラナ科が多く確認され、ソバ属も見られることからこれらが遺構周辺で栽培されていた可能性が推定される。アブラナ科にはダイコン、ハクサイ、アブラナなど多くの栽培植物が含まれている。【植物珪酸体分析】中世ではSK0645、SX173、SD158で実施している。何れもイネが確認されており、検出量も多い。特にSK0645では42000個/gと極めて高い値であり、ムギ類も含まれている。一般に水田の判断基準は5000個/g以上としているので、非常に高密度で含有していることが分かる。これらは、種実遺体でもイネとムギ類の炭化果実が確認されていることと矛盾しない。おそらく、任海宮田遺跡内もしくは近隣でイネやムギ類を栽培していたと推定されよう。SD158ではチマキザサ節型も少量みられた。古代ではSI23のカマドの試料があり、イネやチマキザサ節型が少量含まれていた。これらが、堆積地周辺に生育していたと考えられる。【種実同定】中世の遺構から得られている。SK0645からはイネの炭化果実(46個体)の他にコムギ(31個体)・オオムギ(52個体)といったムギ類の炭化果実が得られた。SX173からはイネの炭化果実が得られている。また、SK744、SK745、SX154からはイネ炭化果実が集塊で検出されている。【樹種同定】中世の遺構から出土した炭化材を中心として実施している。古代からみていくと堅穴建物SI23のカマドからハリギリ2点、サクラ属1点の合計3点が同定されている。他には住居内の覆土からハリギリが1点出土している。中世では土坑から9点出土しており、カエデ属3点、スギ2点、トチノキ1点、ニシキギ属1点、ノリウツギ1点、タケ垂科1点が同定されている。柱穴からはクマシデ属クマシデ節1点、クマシデ属1点が同定されている。他の遺構としては大型土坑SXでクマシデ2点、ハンノキ属ハンノキ節1点、サクラ属1点が確認されている。

・B13地区：【花粉分析】中世のSE08で実施している。樹木より草本が卓越していることから、周辺には森林は少なく、あっても孤立木程度であったと考えられる。木本ではスギが優占しており、他にアカガシ亜属・コナラ亜属などがみられる。また、樹木と草本を含むクワ科・イラクサ科も高い出現率を示す。草本ではイネ科・カヤツリグサ科・アカザ科・ヒユ科・ヨモギ属などがやや多く検出されている。このことから、やや乾燥した日当たりの良い環境が推定されている。また、栽培のイネを含むイネ属型も少量みられたことから、遺構周辺で栽培されていたと推定される。クワ科・イラクサ科にはクワやアサ・カラムシなどが含まれることから、これらの種類も栽培されていた可能性が考えられる。【植物珪酸体分析】中世のSE08で実施している。イネが高い出現率を示しており、他に少量

だがキビ族型、シバ属、スキ属型、ウシクサ族Aが検出されている。【種実同定】中世の井戸SE 08から得られた。イネの炭化果実の他にオオムギの炭化果実が得られている。【樹種同定】古代の堅穴建物遺構から出土した炭化材3点について実施した。ハリギリ？1点、ウツギ属1点、カバノキ属1点である。

・B14地区：【樹種同定】SK0828では炭化材1点について実施し、散孔材と同定された。

⑥ C 地区^{註6)}

・C 5地区：【花粉分析】中世のSK014、SK004、SK013、SK014、SK066で分析を実施している。これらのうち、SK014では樹木花粉の占める割合が草本に比べて卓越している。樹木花粉でもマツ属が優占し、コナラ属コナラ亜属、クマシデ属—アサダ、サワグルミ、ハンノキ属、フウ属、ヒッコリーなどが伴われる。第三紀に絶滅したヒッコリーなどがあり、植物珪酸体でも海綿動物由来の海綿骨針が高密度で含まれていることから、地山起源の堆積物と推定されている。SK004、SK013、SK014、SK066においては花粉がほとんど含まれていなかった。【植物珪酸体分析】中世のSK004、SK013、SK014、SK066で実施している。SK013、SK066からはイネがやや高い出現率を示している。また、部分的にウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども少量検出された。SK066は八尾堺内の覆土を分析しており、イネの植物珪酸体を多く含んだ堆積物であったことが分かった。また、SK014では海綿動物由来の海綿骨針が12万個／g以上と極めて高い数値を示した。【種実同定】中世の土坑SK154から炭化したイネ、オオムギ、ササゲ属の種実類が同定された。また、土坑SK066からは炭化したイネの果実が検出されている。検出された種実遺体は栽培植物であり、これらを利用していたと考えられる。【樹種同定】中世の土坑や溝出土の炭化材である。最も多いのがコナラ属コナラ節6点、つぎに多いのがカエデ属4点であった。他にカバノキ属2点、エノキ属1点、スギ1点であった。

・C 6地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】中世に帰属する土坑SK005について実施した。花粉分析では花粉がほとんど検出されなかった。また、植物珪酸体分析についてはイネの含有密度は低く、他にウシクサ族A、ミヤコザサ節型などが検出された。【種実同定】中世の土坑SK005から未炭化のイネ科が同定された。【樹種同定】中世の土坑出土の炭化材で、エノキ属1点が同定された。

・C 7地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】中世の区画溝であるSD003の南壁の層序と土坑であるSK081を対象として実施した。まず、花粉分析についてはSD003の①～⑦層で実施し、①層と③層で花粉がややまとまって含まれていた。①層は樹木花粉の占める割合が草本に比べて低い。樹木—草本を含むではクワ科—イラクサ科がやや高い傾向にあり、草本ではタンボボア科が優占している。イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科も比較的高い出現率を示している。③層ではやはり草本花粉の占める割合が樹木花粉に比べて高い。樹木花粉ではハンノキ属、コナラ属コナラ亜属がやや高い傾向にある。樹木と草本を含む分類群のクワ科—イラクサ科もやや高い傾向ある。草本ではイネ科が優占し、つぎにカヤツリグサ科、アブラナ科、アリノトウグサ属—サモ属、ヨモギ属がつづく。他に、栽培植物であるイネ属型、ソバ属、ベニバナなどが検出されている。SK081では草本が樹木より優占している。樹木ではコナラ属コナラ亜属がやや多い傾向にある。草本ではイネ科が優占しており、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、タンボボア科、ヨモギ属がつづく。他にソバ属、アリノトウグサ属—サモ属などが検出されている。つぎに植物珪酸体についてみていく。中世の区画溝であるSD003の南壁の層序を対象とした分析と、土坑であるSK081において実施されている。SD003は①～⑦層で実施し、すべての層からイネが検出されている。①層、⑤層、⑦層では1万個／g以上の高い出現数値を示した。また、⑤層ではムギ類も確認されている。SK081ではイネが2万個／g以上の高い

出現数値を示した。ムギ類も一定量が確認されている。他にチマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出された。【種実同定】中世の SD013、SK109からイネが検出されている。【樹種同定】中世の土坑出土の炭化材 4 点で、コナラ属コナラ節 1 点、ミズキ属 1 点、ブナ属 1 点、リョウブ 1 点がそれぞれ同定された。

・C8 地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】古代の溝である SD001 の南壁層序を対象として分析をおこなった。また、古代の堅穴住居 SI01 のカマドや中世の墓壙 SK101、水溜め状遺構 SK058 について併せて実施されている。花粉分析では現耕作土（①）から中世包含層（②、③、④）で花粉の量一定量含まれていた。いずれも樹木花粉に比べ草本花粉が優占している。樹木では上位になるにつれてスギ、マツ属複維管束亞属が多くなる傾向が見てとれる。また、ハンノキ属は一定量検出され、クリ、樹木と草本を含む分類群であるクワ科—イラクサ科は④層でやや多い。草本では④層でヨモギ属が、②、③層でアブラナ科が、①層でイネ科がそれぞれ優占している。古代の溝 SD001 の覆土や、堅穴住居 SI01 のカマド、中世の SK101 からは花粉がほとんど含まれていなかった。SK058 では花粉密度が低いものの、一定量検出されている。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではハンノキ属がやや多く検出されている。草本ではイネ科が優占し、つぎにアブラナ科がつづく。他にソバ属、アリノトウガサ属—フサモ属、タンボボ亞科、ヨモギ属などがある。植物珪酸体分析については SD001 では①～④および⑥からイネが確認されている。中世包含層（②、③）から現耕作土（①）までは 1 万個／g 以上の高い出現数値を示し、中世包含層（④）でも 8000 個／g 以上とやや高い数値であった。⑥層では 800 個／g 程度と低い数値にとどまる。①、③からはムギ類が一定量確認されている。その他には上位層序を中心にウシクサ族 A、ネザサ節型、チマキザサ節型などが少量検出されている。SI01 のカマドからはイネがやや高い値で検出されており、他にチマキザサ節型が確認されている。中世の SK101 からは、イネがやや高い数値を示しており、SK058 では 1 万個／g 以上の高い出現数値を示している。SK058 についてはムギ類も少量確認されている。その他としてススキ属型、ウシクサ族 A などが検出されている。【種実同定】古代の堅穴住居 SI01 カマド、古代の溝 SD001 からイネの炭化果実が検出されている。【樹種同定】炭化材 2 点について同定している。古代の堅穴住居 SI01 カマドからコナラ属クヌギ節 1 点が、中世の土坑 SK090 からコナラ属コナラ節 1 点がそれぞれ同定された。

・C9 地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】古代の堅穴住居 SI02 カマドの試料と、基本層序の中世包含層（IIa、IIb）、古代包含層（IIIa、IIIb）、地山（IIIc）を対象として分析をおこなった。花粉分析では SI02 カマド、基本層序の中世包含層（IIa、IIb）、古代包含層（IIIa、IIIb）、地山（IIIc）の他に SD001 東壁①～⑥層についても分析をおこなった。基本層序の中世包含層 IIb ではややまとまって花粉が検出されていたが、その他の試料からは少量の花粉しか含まれていなかった。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではスギ、ハンノキ属が一定量出現している。草本ではヨモギ属が優占しており、イネ科がつづく。他にカヤツリグサ科、アブラナ科、タンボボ亞科が出現している。植物珪酸体分析については SI02 カマドからイネが 6000 個／g と高密度で検出されている。他にはウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量含まれていた。基本層序では中世包含層である IIa、IIb からは植物珪酸体が含まれていたが、古代包含層の IIIa、IIIb、地山の IIIc からは花粉がほとんど含まれていない。IIa、IIb はイネが IIa で 9800 個／g、IIb で 3700 個／g と一定量の密度が含まれている。その他としてはウシクサ族 A、ミヤコザサ節型などが検出されている。

・C10 地区：【花粉分析】古代の堅穴住居 SI01 カマド、古代の土坑 SK023 で実施しているが、どちら

も花粉含有率は低い。【植物珪酸体分析】古代の堅穴住居 SI01カマドについて分析をおこなったが、植物珪酸体の含有値が低く、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが少量確認された。【樹種同定】古代の堅穴住居 SI01焼土から出土した炭化材 1 点である。マツ属複維管束亞属 1 点が同定された。

・C11地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】古代の堅穴住居 SI02カマドを対象に分析をおこなった。花粉分析については花粉がほとんど含まれていなかった。植物珪酸体分析では SI02カマドからイネが 6000 個／g と高密度で検出されている。他にはウシクサ族 A、チマキザサ節型が少量含まれていた。

・C13地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】SK001の土師器壺の覆土、②層、地山の他に、古代の溝である SD001の覆土（①～⑥層）と中世包含層（①～③層）を対象として分析をおこなった。花粉分析については、SK001の土師器壺の覆土、②層、地山のいずれからも花粉はほとんど含まれていなかったが、②層ではキュウリ属が確認されている。SD001の覆土（①～⑥層）と中世包含層（①～③層）では SD001の覆土（①～⑥層）からは花粉がほとんど含まれていない。中世包含層（①～③層）では樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木ではスギの出現率が高い。他に③層ではハンノキ属が一定量検出されている。草本ではイネ科、ヨモギ属が優占し、つぎにカヤツリグサ科、タンボボ亜科がつづく。①層ではイネ属型、ソバ属、アブラナ科などがみられた。樹木と草本を含む分類群としてはクワ科－イラクサ科が一定量検出された。植物珪酸体分析については SK001土師器壺の覆土、②層、地山の何れにおいても植物珪酸体の含有量は少ない。土師器壺の覆土からはイネ、ウシクサ族 A、ネザサ節型、ミヤコザサ節型が少量確認されている。②層ではチマキザサ節型などが少量確認された。地山からはウシクサ族 A、ミヤコザサ節型が少量検出された。SD001では上位の①と②からイネが一定量検出された。また、ウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども少量含まれていた。中世包含層（①～③層）ではイネが安定して 5000 個／g 前後含有されている。その他としてススキ属型、ウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が確認されている。

・C14地区：【花粉分析】中世の遺構である SK014の①層、②層と古代の堅穴住居である SI06カマド、SI03カマド、SI03貼り床において実施した。花粉がまとまって検出されたのは SI03カマドで樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木ではスギ、ハンノキ属、クマシデ属－アサダが一定量検出されている。草本ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属がつづく。他にアザ科－ヒユ科、タンボボ亜科などが検出されている。樹木と草本を含むではクワ科－イラクサ科が比較的高い出現率を示している。【植物珪酸体分析】SK014の①層、②層と堅穴住居 SI06カマド、SI06カマドⅡ、SI08カマド、SI03カマド、SI03貼り床、SI02カマド、SI01カマドを対象に分析を実施している。中世の SK 014の①層、②層ではイネが高い出現値を示しており、①層ではムギ類も少量検出された。他にシバ属、ウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが確認されている。古代のすべての堅穴住居からはイネが含まれており、SI06カマド、SI03カマドからは 1 万個／g 以上と非常に高い値で含まれており、SI06カマドⅡ、SI08カマドにおいても 5000 個／g 以上と高密度で検出されている。その他としては部分的にススキ属型、ウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが一定量検出されている。【樹種同定】古代の堅穴住居 SI06カマド、SI07カマドから出土した炭化材 3 点である。SI 06カマドではコナラ属コナラ節 1 点、散孔材 1 点が、SI07カマドではクリ 1 点がそれぞれ同定された。

・C15地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】古代の堅穴住居 SI01カマドで分析を実施している。花粉分析では花粉含有率が低いものの、ソバ属が検出されている。植物珪酸体分析についてはイネが 9000 個／g と高密度で検出されている。他にはウシクサ族 A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが少量確認されている。

・C16地区：【花粉分析】【植物珪酸体分析】古墳～古代の土坑 SK001-No 4、SK002と中近世の土坑 SK005を対象に分析を実施している。花粉分析については古墳～古代の土坑 SK001-No 4、SK002からは花粉がほとんど検出されなかった。中近世の土坑 SK005では草本が優占しており、つぎにカヤツリグサ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、アブラナ科、アカザ科＝ヒユ科、アリノトウガサ属＝フサモ属がつづく。他にソバ属が検出されている。樹木と草本を含む分類群ではクワ科＝イラクサ科が一定量の出現率を示している。植物珪酸体分析については古墳～古代の土坑 SK001、SK002でイネが含有しているものの、含有密度は低い。他にチマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが含まれている。中近世の土坑 SK005では1万個/g以上と高密度で検出されているし、イネの糊殻も含まれている。他にシバ属、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が含まれている。【種実同定】中近世の土坑 SK005からイネ炭化果実が同定されている。【樹種同定】古墳時代中期の土坑 SK002から出土した炭化材であり、クリ1点が同定された。

・C22地区：【種実同定】古代の堅穴住居 SI02からイネの炭化果実が検出されている。【樹種同定】古代の堅穴住居のカマドから出土した炭化材である。コナラ属コナラ節2点、クリ1点、ニレ科1点がそれぞれ同定された。

(2) 任海宮田遺跡の古環境と農耕の推定

〈古代〉

古代の包含層や覆土は、しばしば基盤層の黄褐色粘土質シルト～砂との区別が難しい場合が多い。花粉や植物珪酸体などの植物遺体もほとんど含まれていないケースが多く、古環境や農耕の詳細な推定を行うには今回提示したデータでは不足している。ここでは今まで蓄積してきたデータと発掘調査の知見を含めて、古代の任海宮田遺跡の古環境を概観してみる。

まず、比較的まとまった花粉分析結果が得られているF地区やC14地区などをみてみる。遺跡内は森林に乏しく、草本が卓越していたと考えられる。草本の中でもイネ科、ヨモギ属、タンボボ亜科が一定量検出されており、植物珪酸体についてもスキ属型などのイネ科が検出されている。これらの花粉や植物珪酸体は日当たりの良い、乾燥した環境に生育する分類群である。このことから、分析地点である集落域近隣は、イネ科、スキ属、ヨモギ属、タンボボ亜科などが繁茂する日当たりの良い、やや乾燥した草原的な景観が想定される。樹木は孤立木程度か、もしくはハンノキやスギなどの小規模な林が部分的に分布していたことが考えられる。つぎに農耕についてみると、発掘調査では明確な水田遺構は検出されていない。ただし、水田か畑かは不明であるが方形区画溝や耕作痕とみられる溝状の遺構群がI地区、A1地区・B6地区などで確認されている。特にI地区的耕作に関連するとみられる方形区画溝において植物珪酸体分析が行われており、イネの植物珪酸体が微量ながら含まれている。また、C11地区 SI02やC14地区 SI03など多くのカマドからはイネ炭化果実や燃料材として使用されたイネの植物珪酸体が検出されている。このことから、遺跡内もしくは近隣でイネを栽培していた可能性が考えられる。ただし、イネ属型の花粉やイネの植物珪酸体の含有率が全体的に高くなかったことを考えるとイネの生産量自体はさほど多くなかったと推定される。更に推測が許されるのであれば、生産域は例えば河道に近い利水の良い場所や旧河道など周囲より一段低い場所などに限定され、かつ同一地点での恒常的・集約的な生産を行っていたことが考えられよう。イネ以外については、どの分析結果においても、明確な栽培植物を含む分類群は検出されていない。しかし、C14地区 SI03などの花粉分析結果ではクワ科＝イラクサ科の出現率がやや高い数値を示しており、この分類群にはアサ・

クワ・カラムシなどが含まれる。クワ科には織物や衣類などに必要な纖維が得られるアサや養蚕に欠かせないクワなどが含まれるし、イラクサ科にも纖維作物であるカラムシが含まれている。発掘調査では糸を紡ぐ道具として使用された鉄製の紡錘車などが出土している。こうしたことから、任海宮田遺跡でもアサ・クワなどが栽培され、纖維や織物などの手工業も営んでいた可能性が指摘できよう。

遺跡周辺については、花粉分析結果から遺跡内と同様に樹木より草本が卓越していたと考えられる。樹木はあっても孤立木程度か小規模な林が点在していたと推定される。草本の分類群については不明であるが、おそらく遺跡内と同じようなイネ科・ススキ属・ヨモギ属・タンボボ亜科を中心とした草原的な景観が想像される。ところで、樹種同定結果ではB6地区の土師器焼成遺構出土の炭化材からはクリ、コナラ属コナラ亜属、ヒサカキ、ケンボナシ属、ブナ属などが同定された。つまり、これらの炭化材が燃料材として用いられた可能性が高いと考えられる。また、堅穴建物カマドから検出されたハリギリ、サクラ属、カエデ属、ケヤキ、コナラ属クヌギ節なども日常生活で煮炊する時の燃料材として使用された可能性が高いと考えられる。つまり、これらの分類群は基本的には遺跡近隣もしくはさほど離れないところから供給されたと推定される。また、I地区の花粉分析では、コナラ属コナラ亜属・クリ・ブナ属・ニレ属・ケヤキ属・アカガシ亜属が確認されている。以上のことから遺跡周辺から後背地の古植生は、コナラ属コナラ亜属・クリ・ブナ・ケヤキなどの落葉樹広葉樹にアカガシ亜属・ヒサカキなどの常緑樹広葉樹を含む混交林が成立していたと考えられる。

古代の耕作痕と考えられる溝状遺構を覆う堆積物は均質な黄灰色シルト～粘土であるため、短期間に埋没したことを示唆している。おそらく一度に遺構を覆うような洪水によって、多量のシルトや粘土で覆われたと推定される。また、この頃より、中世の包含層に顯著な黒褐色粘土質砂（10世紀代の一部の堅穴建物の覆土に既にみられることから、10世紀代から部分的に形成が始まっていたと推定される）の形成が広範囲に開始されると考えられる。この黒褐色粘土質砂は任海宮田遺跡一帯では中世包含層に比定されている。ただし、その形成過程についてはいまだ不明な点が多い。

〈中世以降〉

中世の包含層は、黒褐色粘土質砂であり、花粉や植物珪酸体の遺存状態が比較的良好である。花粉分析結果から、古代と同様に遺跡内は草本が卓越していることが推定される。草本でもイネ科が多く、ヨモギ属・タンボボ亜科などが一定量出現している。このことから、集落城周辺は基本的にはイネ科・ヨモギ属・タンボボ亜科が繁茂するような日当たりの良い、乾燥した環境が推定される。また、溝などにはアリノトウグサ属・フサモ属などの水湿地性植物が生育していたと考えられる。樹木は孤立木程度であり、マツ属・スギ・ハンノキ属などが生育していたと考えられる。農耕については、水田遺構が確認されているわけではないものの、花粉分析や植物珪酸体分析などの分析結果から、溝や遺構内覆土からイネの植物珪酸体やイネ属の花粉が普遍的に出現している。イネ炭化果実も多数の遺構から確認されていることなどを考え合わせると、遺跡内や近隣ではイネの栽培が広く行われていたと考えられよう。また、花粉生産量の少ない虫媒花のソバ属・アブラナ科の花粉が出現するようになり、植物珪酸体においてはムギ類が一定量みられるようになる。種実同定ではオオムギ・コムギの炭化果実が同定されていることから、これらソバやアブラナ類、ムギ類の生産も広くおこなわれるようになったと推定される。更に、種実同定ではササゲ属などのマメ類が同定されており、C7地区SD03の花粉分析では染料などに利用されるベニバナがわずかに出現していることから、マメ類の他にベニバナも栽培していたと推定されよう。花粉分析でクワやアサ、カラムシなどが含まれるクワ科・イラクサ科も部分的に出現率が高くなることからこれらの有用植物も栽培していた可能性が考えられよう。

遺跡周辺についてはやはり樹木に比べ草本が卓越していたと考えられる。樹木はマツ属・スギ・ハンノキ属などの孤立木か、規模の小さな林が分布していたと考えられる。草本でもイネ科・ヨモギ属・タンボポ亜科が繁茂する、日当たりの良い、乾燥した環境が推定される。土坑を中心に出土した炭化材には、コナラ属コナラ節・カエデ属・スギ・クマシデ属、ハンノキ属ハンノキ節など含まれていることから、遺跡からさほど離れない場所から遺跡内に供給されたと考えられる。花粉分析では、コナラ属コナラ亜属・クリ・ブナ・ケヤキ・アカガシ亜属が確認されていることから、遺跡周辺から後背地には依然としてコナラ属コナラ亜属・クリ・ブナ・ケヤキなどの落葉広葉樹にアカガシ亜属などの常緑広葉樹を含む混交林が古代からひきつづき分布していたと考えられる。ただし、中世の包含層の上位ほど、開地や伐採地などに先駆的に進入する二次林的な要素であるマツ属や山野などに広く植林されるスギなどの花粉が増加傾向にあることから、部分的もしくは一定の規模でマツ属・スギ林の分布域が拡大したと考えられる。その一方で、この頃から任海宮田遺跡では従来の集落形態が解体し、小集落または散村の形態へ移行する時期と考えられる。集落自体が大きく改変し、散居的な形態を取るようになることから、スギ花粉増加については後背地の混交林の伐採に伴いスギ林が拡大したこと为主要因と考えられるが、屋敷林としてのスギが植林された結果も要因の一つと考えられる。

近世についてはやはり樹木より草本が卓越していると考えられる。また、イネの栽培も普通に行われ、ソバ属・アブラナ科・ムギ類などの畑作物も広く栽培されていたと推定される。集落は水田の中に宅地が散在する散居形態が確立する時期と考えられ、現在につづく田園景観が確立した時期と考えられる。

(中村 亮仁)

註

註1) パリノ・サーヴェイ株式会社 1996「任海宮田遺跡の古代～中・近世の古環境変遷と稲作の消長」『任海宮田遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター

註2) 註1) 文献に同じ

註3) 註1) 文献に同じ

註4) パリノ・サーヴェイ株式会社 1997「任海宮田遺跡I地区における古環境復元および遺構に関する検討」富山県埋蔵文化財センター『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』

註5) 株式会社古環境研究所「任海宮田遺跡B地区における各種分析」財團法人富山県文化振興財團 2007「任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ」

註6) 株式会社古環境研究所「任海宮田遺跡C地区における自然科学分析」財團法人富山県文化振興財團 2008「任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ」

参考文献

大田弘・小路登一・長井真隆 1983『富山県植物誌』廣文堂

武田健次郎 1998『富山平野における遺跡群の展開』『富山考古学研究紀要創刊号』財團法人富山県文化振興財團
財團法人富山県文化振興財團 2006『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』

富山県植生調査研究会 1997『富山県の植生』富山県

富山県埋蔵文化財センター 1998『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』

富山市教育委員会 1998『富山市任海宮田遺跡試掘調査概要－県営公害防除特別土地改良事業に伴う試掘調査(3)－』

中村亮仁 2005『中名遺跡群における古環境復元』『中名V・VI遺跡・砂子田I遺跡発掘調査報告』財團法人富山県文化振興財團

表1-1 任海宮田遺跡分析試料一覧(1)

地区	地点・遺構	花粉分析	植物組織 体分析	種実同定 分析	樹種同定
I 地区	第2遺点	●	●		
	第3遺点	●	●		
CS 地区					
F 地区	SX-01	●	●		
	SD-02	●	●		
D 地区	SD-03	●	●		
	SD-05	●	●		
B1 地区	SK159				●
	SK269				●
	SK264				●
B2 地区	SD032			●	
	SM08			●	
	SN20			●	
	土師器底灰遺構				
	土師器底灰成道佛司道瓦合物				●
	土師器底灰瓦構-23西ブロック		●		
	SH12			●	
	SH13カマド			●	
	SH13-1 カマド内		●		
	SH13瓦範周			●	
	SH17				
	SH19			●	
	SE21			●	
	SE22			●	
	SE22カマド		●		
	SE22カマド覆土		●		
	SK0434				●
	SK1177			●	
	SK1208灰土			●	
B6 地区	SK1213			●	
	SK1265灰土		●		
	SK1303			●	
	SK1345				
	SK1346灰土		●		
	SK1353			●	
	SP128			●	
	SD067			●	
	SD081			●	
	SD099			●	
	SD112			●	
	SD116			●	
	SD033			●	
	SN209			●	
	SN219			●	
B10 地区	SK0518			●	
	SK23				●
	SK23カマド				●
	SK0556				●
	SK0578				●
	SK0545				●
	SK0645灰土・炭		●		
	SK0659				●
	SK0708				●
	SK0705				●
	SK0709				●
B12 地区	SK0712				●
	SK0890				●
	SP0357				●
	SP1179				●
	SD1568最下層	●	●		
	SK128				●
	SK152				●
	SK154				●
	SK168				●
	SK173				●
	SK173灰化層		●		
B13 地区	SK28				●
	SK29				●
	SK32				●
	SE06最下層	●	●	●	
	SE06最下層内		●		
B14 地区	SK0828				●

表1-2 任海宮田遺跡分析試料一覧(2)

地区	地点・遺構	花粉分析	植物組織 体分析	種実同定 分析	樹種同定
C4 地区	SK0202瓶内			●	
	SK0132	●	●	●	●
	SK0133		●	●	●
	SK014		●	●	
	SK016				●
	SK018				●
	SK046				●
	SK061				●
	SK066		●	●	●
	SK069				●
C5 地区	SK075				●
	SK075北西ブロック				●
	SK107				●
	SK111				●
	SK135				●
	SK135表面土				●
	SK154				●
	SD001				●
	SD001a1				●
	三層				●
C6 地区	SK036		●	●	●
	SK045				●
	SK024				●
	SK054				●
	SK081		●	●	
	SK109				●
	SK156				●
	SD002				●
	SD0031)~(7)		●	●	
	SD0041)~(7)		●	●	
	SD013				●
	SE01カマド		●	●	●
	SK058				●
	SK090				●
C8 地区	SK101		●	●	●
	SE01				●
	SD001				●
	SD0011)~(9)		●	●	
	SE02カマド		●	●	
	SE02				
C9 地区	SK017				●
	SD0013)~(8)		●	●	
	基本層IIa・IIIe層				●
	SE01灰土				●
C10 地区	SE01カマド				●
	SE01				●
	SK021				●
C11 地区	SE01カマド				●
	SE02カマド				●
	SK0012)・障壁		●	●	
	SK0012)・障壁				●
	SK002				●
	SK00202)・障壁		●	●	
	SE0013)~(6)		●	●	
	基本層IIa)~(3)				●
	SE01カマド・廻避				●
	SE01點火場				●
	SE06カマドⅡ				●
	SE07カマド				●
	SE08カマド				●
	SK014				●
	SK0141)場				●
	SK0142)場				●
C14 地区	SE01カマド				●
	SE01點火場				●
	SE06カマドⅡ				●
	SE07カマド				●
	SE08カマド				●
	SE09カマド				●
	SE01				●
	SK0013)~(4)				●
	SK002				●
	SK005				●
	SE02カマド				●
	SE02				●
C15 地区	SE01カマド				●
	SE01				●
	SK0013)~(6)				●
C16 地区	SE01				●
	SK0013)~(4)				●
	SK002				●
	SK005				●
	SE02カマド				●
	SE02				●
C22 地区	SE09カマド				●
	SE09カマド				●
	SE01カマド				●

表2 任海宮田遺跡出土花粉一覧

裸子植物	アカザ科 Chenopodiaceae アカザ科-ヒユ科 Chenopodiaceae - Amaranthaceae ナデシコ科 Caryophyllaceae キンポウゲ科 Ranunculaceae カラマツソウ属 Thalictrum アブラナ科 Cruciferae マンサク科 Hamaelidaceae フウ属 Liquidambar マメ科 Leguminosae フウロソウ科 Geraniaceae フウロソウ属 Geranium トウダイグサ科 Euphorbiaceae アカメガシワ属 Mallotus ウルシ科 Anacardiaceae ウルシ属 Rhus モチノキ科 Aquifoliaceae モチノキ属 Ilex ニシキギ科 Celastraceae ニシキギ属 Euonymus カエデ科 Aceraceae カエデ属 Acer トチノキ科 Hippocastanaceae トチノキ属 Hippocastanum トチノキ Aesculus turbinata ツリフネソウ科 Balsaminaceae ツリフネソウ属 Impatiens ブドウ科 Vitaceae ノブドウ Ampelopsis brevipedunculata ブドウ属 Vitis アリノトウグサ科 Haloragaceae アリノトウグサ属-フサモ属 Haloragis - Myriophyllum ウコギ科 Araliaceae セリ科 Umbelliferae セリ亞科 Apioideae チドメグサ亞科 Hydrocotyloideae ミズキ科 Cornaceae ミズキ属 Coruns ツツジ科 Ericaceae カキノキ科 Ebenaceae カキ属 Diospyros モクセイ科 Oleaceae イボタノキ属 Ligustrum ナス科 Solanaceae オオバコ科 Plantaginaceae オオバコ属 Plantago スイカズラ科 Caprifoliaceae タニウツギ属 Weigela ウリ科 Cucurbitaceae キュウリ属 Cucumis ヤク科 Compositae キク亞科 Asteroideae タンポポ亞科 Lactucoideae ヨモギ属 Artemisia オナモミ属 Xanthium ベニバナ Carthamus tinctorius
マキ科 Podocarpaceae	
マキ属 Podocarpus	
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	
Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae	
マツ科 Pinaceae	
マツ属 Pinus	
マツ属複管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	
マツ属單維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	
ツガ属 Tsuga	
モミ属 Abies	
トウヒ属 Picea	
コウヤマキ科	
コウヤマキ属 Sciadopitys	
スキ科 Taxodiaceae	
スキ属 Cryptomeria	
スキ Cryptomeria japonica	
被子植物	
単子葉類	
オモダカ属 Alismataceae	
サジオモダカ属 Alisma	
イネ科 Gramineae	
イネ属型 <i>Oryza</i> type	
カヤツリグサ科 Cyperaceae	
ホシクサ科 Eriocaulaceae	
ミズアオイ科 Pontederiaceae	
ミズアオイ属 Monochoria	
被子植物	
双子葉類	
ヤナギ科 Salicaceae	
ヤナギ属 Salix	
クルミ科 Juglandaceae	
クルミ属 Juglans	
ベカシ属 Carya	
ヒッコリ属 Carya ovalis	
サワグルミ Pterocarya rhoifolia	
カバノキ科 Betulaceae	
ハシバミ属 Corylus	
カバノキ属 Betula	
クマシテ属-アサダ Carpinus - Ostrya japonica	
ハンノキ属 Alnus	
ブナ科 Fagaceae	
クリ Castanea crenata	
シイ属 Castanopsis	
コナラ属アカガシ亜属	
<i>Quercus</i> subgen. Cyclobalanopsis	
コナラ属コナラ亜属	
<i>Quercus</i> subgen. Lepidobalanus	
ブナ属 Fagus	
ニレ科 Ulmaceae	
ニレ属-ケヤキ <i>Ulmus</i> - <i>Zelkova serrata</i>	
ニレ属-ケヤキ属 <i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	
エノキ属-ムクノキ <i>Celtis</i> - <i>Aphananthe aspera</i>	
エノキ属-ムクノキ属 <i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	
クワ科 Moracae	
クワ科-イラクサ科 Moracae- Urticaceae	
タデ科 Polygonaceae	
タデ属サナエタデ節 <i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	
サナエタデ節-ウナギワカミ節	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> -	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon</i>	
ソバ属 <i>Fagopyrum</i>	

表3 任海宮田遺跡出土植物珪酸体一覧

被子植物	
単子葉類	
イネ科	Gramineae
イネ	<i>Oryza sativa</i>
ムギ類	<i>Hordeum</i> – <i>Triticum</i>
キビ族	Paniceae type
ヨシ属	<i>Phragmites</i>
シバ属	<i>Zoysia</i>
ウシクサ族	コブナグサ属 (Andropogoneae)
ススキ属	<i>Miscanthus</i>
ウシクサ族	Andropogonaceae
ウシクサ族 A	Andropogonaceae A type
ウシクサ族 B	Andropogonaceae B type
イチゴツナギ亞科	Pooideae
不明キビ型	–
不明ヒゲシバ型	–
不明ダンチク型	–
タケ亜科	Bambusoideae
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>
マダケ節型	<i>Phyllostachys</i>

表4 任海宮田遺跡出土種実一覧

被子植物	
単子葉類	
イネ科	Gramineae
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i>
コムギ	<i>Triticum aestivum</i>
イネ	<i>Oryza sativa</i>
被子植物	
双子葉類	
マメ科	Leguminosae
ササゲ属	<i>Vigna</i>

表5 任海宮田遺跡出土樹種一覧

裸子植物	
マツ科	<i>Pinaceae</i>
マツ属複雜束葉車属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
スギ科	Taxodiaceae
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>
スギ?	<i>Cryptomeria japonica?</i>
被子植物	
單子葉類	
タケ亜科	Bambooideae
被子植物	
双子葉類	
カバノキ科	Butuceae
カバノキ属	<i>Butia</i>
ハンノキ属ハンノキ節	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrus</i>
クマシデ	<i>Carpinus</i> <i>japonica</i>
クマシデ属クマシデ節	<i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i>
ブナ科	Fagaceae
クリ	<i>Castanea crenata</i>
コナラ属クヌギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prina</i>
コナラ属カガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
ブナ属	<i>Fagus</i>
ニレ科	Ulmaceae
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>
エノキ属	<i>Celtis</i>
クワ科	Moraceae
ヤマグワ	<i>Morus australis</i>
ユキノシタ属	Saxifragaceae
ノリウツギ	<i>Hydrangea paniculata</i>
ウツギ属	<i>Deutzia</i>
バラ科	Rosaceae
サクラ属	<i>Prunus</i>
ミカン属	Rutaceae
アカメガシ	<i>Mallotus japonicus</i>
トウダイグサ科	Euphorbiaceae
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>
ニシキギ属	Celastraceae
ニシキギ属	<i>Euonymus</i>
カエデ科	Aceraceae
カエデ属	<i>Acer</i>
トチノキ属	Hippocastanaceae
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i>
クロウメモドキ属	Rhamnaceae
ケンボナシ属	<i>Hovenia</i>
ツバキ科	Theaceae
ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
ウコギ科	Araliaceae
ハリギリ	<i>Kalopanax pictus</i>
ハリギリ?	<i>Kalopanax pictus?</i>
ウコギ属	<i>Aralia</i>
ミズキ科	Comaceae
ミズキ属	<i>Cornus</i>
リョウブ科	Clethraceae
リョウブ	<i>Clethra barbinervis</i>
散孔材 diffuse-porous wood	

図1 任海宮田遺跡の古環境変遷図

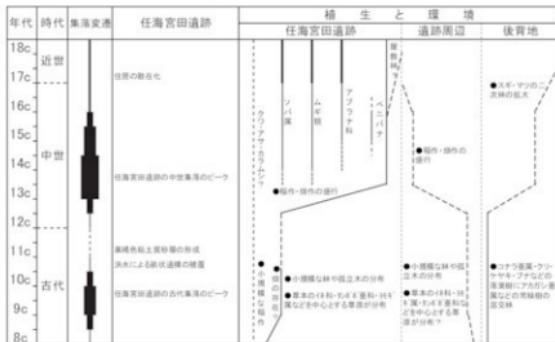




図2 古代の古環境復元模式図（1／7,500）



図3 中世の古環境復元模式図（1／7,500）

第VII章 結語

本書は、当財団で平成12～15年度の4箇年に渡って発掘調査を行なった任海宮田遺跡の内、C地区とした調査地点の本報告書である。既に報告したA・B地区（富山県文化振興財團2006・2007）を合わせ、本遺跡の報告はこれをもって終了することになる。

これまでの報告を含め、任海宮田遺跡では古代と中世において集落が形成されていたことが分かった。その詳しい内容は、本書を含め各報告書で提示してきた。ここでは遺跡全体における時期毎の様相を概観し、結語としておきたい。

1 古代以前

古代以前では明確な遺構は認められなかった。但し、C16地区など一部の地区で、旧河道や谷状地形内に、古墳時代中期～後期頃の土器が出土している。遺跡の中央付近に、そうした遺物の出土がやや多い傾向は窺える。何らかの活動が行なわれていた可能性があったとしても、おそらく短期的なもので、その内容も明かでない。

2 古代

A・B・C地区の調査を通じて検出した主な遺構としては、堅穴住居113棟、掘立柱建物14棟、礎石建物1棟、土師器焼成遺構2基がある。この内、堅穴住居は8世紀後半から10世紀中頃まで変遷しつつ存続する。掘立柱建物は9世紀代以降に出現し、大型掘立柱建物は9世紀後半～10世紀初頭、礎石建物は10世紀前半に存在する。これに対し、遺跡の北東部に設定された県埋蔵文化財センター調査地（富山県埋蔵文化財センター1996・1997・1998）では、建物の出現はやや早く、8世紀前半に遡る。一部に掘立柱建物を含むが、やはり堅穴住居を中心には建物群が形成される。

こうした成果から、任海宮田遺跡は8世紀前半以降、10世紀中頃までの存続期間を有した集落と言える。遺構の分布からは、遺跡東側の熊野川沿いに形成された自然堤防上の南北に長い範囲に建物群が形成され、遺跡中央～西側では旧河道や疊層により分断された微高地上に建物群が点在する景観を有していたと考えられる。

先述の通り、古代以前に任海宮田遺跡で建物は確認されず、8世紀以降に扇状地上の開発を目的として進出してきたと思われる。このような扇状地上への新規開発的な集落が、古代以降に富山平野で多く形成されることは、すでに指摘されている通りである（武田1998）。しかし、任海宮田遺跡に現れた集団が、いずれの地から進出してきたかは定かでない。任海宮田遺跡の南東側、扇状地背後の台地縁辺に確認される古墳時代後期の伊豆宮古墳に代表されるような集団が存在し、その系譜下にあるかもしれない。あるいは、神通川左岸の古代集落について、井田川～呉羽丘陵東麓の既存勢力による開発の可能性が指摘されている（内田2005）ように、その影響力が神通川右岸の地域まで及んだとすることも考えられよう。いずれにしても、現段階では憶測の域を脱せず、今後の課題とせざるを得ないであろう。

さて、任海宮田遺跡における集落変遷の流れを、A・B・C地区の成果を中心に振り返ると以下のようになる。

8世紀後半から9世紀前半では遺跡の中央と東側の2箇所の範囲で、主に堅穴住居からなる建物群

が形成される。その規模や一部に掘立柱建物が加わることから、この段階では東側が中心的な役割を担っていたと思われる。

9世紀中頃から10世紀初頭では、遺跡の西側にも建物群が現れ、中央・東側を含めた3箇所で建物群が展開していく。西側にはB1地区で大型掘立柱建物、B6地区では土師器焼成遺構が存在し、出土遺物などからも他の建物群に比べ優位性を窺うことができる。大型掘立柱建物や灰軸の使用状況についての検討（武田2006）からは、在地有力層主導型の経営拠点であると考えられる。中央では奈良三彩火舎や鉄鉢形土師器鉢などから、仏教的な内容を中心とした祭祀行為が行なわれていた可能性がある。東側はA1・C19地区で掘立柱建物が1棟ずつ確認されるが、基本的に竪穴住居で構成され続ける。土器組成では9世紀後半以降に土師器供膳具の比率が高くなり、その傾向は西側において明瞭であった。同時に西側では土師器煮炊具の比率が低く、大型掘立柱建物の経営主体による鉄製煮炊具を用いた集中的な炊さんが可能性として浮かび上がる。この現象は、越中では10世紀初めには、「土器煮炊具を減少させるほど鉄の鍋・釜が普及しつつあった」（宇野1989）と指摘されていることと符号する。だが、同時期の東側竪穴住居群では、土師器煮炊具は一定量出土している。9世紀後半以降に、鉄製煮炊具が使用されていたとしても、開発拠点に関わる一部であったと考えられる。こうしたやり方が、どの程度の規模や内容の集落で確認できるのかは、今後も検討される必要があろう。その際には、土器組成把握のために、計量作業が不可欠であることは言うまでもない。

10世紀前半では西・東側に建物群が形成される。西側では掘立柱建物と礎石建物を含み、前段階からの性格を引き継ぐが、経営規模は縮小する。土器組成では、西側と東側で明瞭な相違が認められる。西側では9世紀後半以降の土師器供膳具が多く、土師器煮炊具が少ない傾向がさらに顕著となる。東側でも供膳具の主体は土師器となるものの、全体に土師器煮炊具が多くを占めている。このことから、西側では大型掘立柱建物は無くなるものの、9世紀後半以降の炊さん形態が維持されていると考えられ、やはり経営主体の存在が窺える。確認された掘立柱建物や礎石建物が、それに関連する可能性があるが、中心的な施設であるかは判然としない。

このように長期間存続した集落を支えた生産基盤は、どの様なものであったのだろうか。遺跡周辺の古環境についての考察からは、樹木が少なく草の茂っていた環境であったことや、稲作の生産量はあまり多くなかったことが指摘されている。ここで遺跡の性格を考えた場合、新規に扇状地上を開発し、収穫物が得ることが主要な目的であったと思われる。また、それがある程度達成できたことが、建物群が存続することができた背景にあると考えるならば、稲作の生産量があまり多くないという結果とは相反する。もちろん、古環境を復元する資料として、花粉や植物珪酸体が遺存しにくいことも念頭に置かねばならない。実際は、一定量の収穫を得ていた可能性もある。あるいは、稲作以外の生産行為を想定する必要もある。花粉分析からは、アサ・クワなどの栽培も指摘され、出土する鉄製紡錘車と合わせ、織維生産も集落における生産行為の一部であってことが確認できる。また、畠とみられるさく状遺構が確認されることも、稲作以外の生産を窺わせる。さらに、土鍤の出土状況からは、河川を利用した水産資源の獲得も生産の主要な要素であったと考えられる。こうした、多様な生産活動が集落経営を支えていたとも考えられる。

また、特徴的な出土遺物として墨書き土器が挙げられる。出土量・文字の種類ともに多くあるが、特に「成」・「平」・「繩足」・「貳」・「城長」の文字が一定量出土している。「成」・「平」が遺跡西側で、9世紀中頃～10世紀前半にかけて継続的にある。「繩足」・「貳」・「城長」は東側に分布している。9世紀中頃に「繩足」、9世紀後半に「貳」が加わり、さらに「城長」と変化する。こ

うした特定文字の出土分布から、それらの文字が集団を示すものと考えられている（中野2001）。その考えに従えば、西側の「成」・「平」集団は継続的に經營へ参画していたことになる。逆に、東側では時期毎に「縄足」・「貳」・「城長」の各集団に經營が移り替わったことになる。あるいは、集団を象徴する文字が変化したことになろう。いずれにしても、前者は継続的に存在し、手工業生産活動や施釉陶器の保有などを加味すれば、9世紀中頃以降の集落内における優位性が窺える。

このように、複数の集団により任海宮田遺跡は經營されていた可能性があるが、それらを主導したのはどの様な人物あるいは集団であったのだろうか。集落内では小型の堅穴住居が主要な建物となり、一部に掘立柱建物や大型掘立柱建物があるものの、倉庫群は形成されてはいない。農耕を始め、他の生産行為から得られた収穫物は、それらの保管機能を有した本貫地に運ばれたと推測される。つまり、任海宮田遺跡での開発・經營主体の本拠地は別の場所にあると思われる。

そうした本貫地を推測する試みとして、土器の胎土分析により、その供給元を探った。結果は複数の産地が認められ、一元的な供給とは言い難い結果となった。任海宮田遺跡の所在している場所は、古代において婦負郡と新川郡の境界付近にあり、判然としない。いずれにしても、どちらかの郡に所在する窯跡からの供給と推測していたが、胎土分析では県中央や西部の製品が含まれている可能性が示された。つまり、射水・砺波郡の製品も搬入されていたことになる。また、産地不明となつた胎土群が一定量存在することも分かった。この産地不明の粘土素地は土師器焼成遺構の製品や、「成」の線刻がある須恵器も該当した。このことから、「成」の文字と関連する集団が、この胎土群を用いた製品の製作に関わりが深いことになる。今後、この産地が明らかになることが、任海宮田遺跡における集落經營の背景を考える上で重要な点になると思われる。さらに、こうした製品の広がりが、任海宮田遺跡以外にどの程度の認められるのかも、確認されるべき課題となろう。

なお、胎土分析からは「家成」の墨書き須恵器が県西部の窯跡群と推定された。「家成」については、旧井波町に所在する高瀬遺跡でも出土している。さらに、越中国官倉納穀交替帳には砺波郡意斐村、同郡川上村の官倉検収に署名している郡司に、偶々擬主政中臣家成の名があることが指摘されている（富山県教育委員会1974）。高瀬遺跡出土の「家成」はもとより、任海宮田遺跡出土の「家成」もこれと同一人物であるが明かでない。仮にそうした郡領層が、郡域を超えて進出する程の勢力を持ち、それが可能となる社会的な状況があったとするならば、それ以降の大型掘立柱建物や土師器焼成遺構が現われる条件が徐々に醸成されつつあったことを示唆するものと思われる。

3 中近世

A・B・C 地区の調査により、中近世では掘立柱建物214棟、井戸36基の他、多くの土坑や溝が検出された。

中世集落を構成する建物は12世紀後半に一部が出現し、13世紀以降に本格的な展開を見せる。14世紀後半以降に建物数は減少し、集落規模が縮小化する。15世紀以降は小規模な建物群を形成しつつ存続するが、16世紀代の建物群は明らかでない。その後、近世の建物群が認められる。これらの分布は、古代と同じく旧河道に分断された微高地に位置している。

中世集落が出現する以前は、古代の集落が途絶しており、改めて扇状地上の土地を開発するために集落が形成されたと考えられる。その背景には徳大寺家領宮河荘の存在があり、荘域内の可耕地を拡大する目的があったと推測される。

こうした中世集落の変遷を、A・B・C 地区の成果を中心に示しておきたい。

中世前半、およそ12世紀後半～14世紀代における建物群の分布範囲は、遺跡の西側・中央・東側の3つに大別される。一部の建物は12世紀後半、遺跡全体に建物群の形成が始まるのは13世紀以降となる。西側では南北方向に長い幾つかの微高地上に建物群が形成される。特にその南部のB1・3・4地区を中心とする。また、北東部にあるC5・7地区では土坑群が14世紀後半で形成され始め、以後存続する。中央では範囲が狭く、建物数も少ない傾向にある。建物群の形成開始段階ではC9・10・11地区を中心とする。その後、主要な建物群は北側のC13～16地区へと移動する。東側では建物群形成の初期には熊野川沿いを中心に、南北に長く建物群が広がる。B12地区や県埋蔵文化財センター調査地L1地区を中心に大型の建物が多い。14世紀代には範囲が縮小し、B12地区に主要な建物群の形成がある。建物は総柱建物を主体とするが、時間的な経過と共に側柱建物が増加傾向にある。建物群は100m²以上の大型建物を中心に、それに及ばない大きさの建物が付随する構成を呈する。また、B4地区では任海宮田遺跡で確認された掘立柱建物の内、最大面積の建物が存在する。土器組成では、B4・13地区で中世土師器の比率が高い傾向にある。中国製陶磁器はB1・3・4地区、瀬戸美濃はB1・4・13地区での出土が目立つ。また、B2～4地区は白磁の壺類も一定量保有する。中世土師器の消費量が多く、土器の種類や器種が豊富な点から、B4・13地区を中心とした一角に優位性が窺える。さらにB1、C20地区では遺構や土器組成の点から、物資集散に関わりが強い可能性がある。こうした建物規模や土器組成から、経営の中心となったであろうB4・13地区の建物群には、河川を利用した物流機能を果たす場所が隣接していたと思われる。

中世後半、15～16世紀代でも同様の分布域を呈するが、建物棟数は減少し、規模も縮小していく。西側ではB1～3・6地区に建物群が存続するが、棟数は減少し散在する。建物規模も縮小する。これらの建物群も15世紀代で消滅する。C5・7地区では土坑群が16世紀代まで継続して形成される。中央での棟数や分布は前段階と同様であるが、建物規模は縮小し、15世紀代には断絶する。東側ではB12地区のみに建物群があり、100m²を越す建物がわずかに存在する。また、台形状の区画も確認されるが、区画内に建物ではなく、性格は判然としない。建物は側柱構造へと変化し、規模も縮小する傾向にある。土器組成では中世前半に比べ、中世土師器や瀬戸美濃の比率がやや高まる。特にC5・7地区では中世土師器が集中的に出土し、瀬戸美濃・瓦質土器などの種類・器種が豊富である。おそらくは墓壙群や宗教施設に関連して機能していたと考えられる。

近世以降では中央のC14・23地区で建物が確認される。多数の石組み・素掘り井戸が伴う。近世初頭に掘立柱建物が構築された後、一旦整地を行ったと考えられるが、その後の建物の様相は明らかでない。その他、A18、C8地区などで当該期の遺構・遺物が出土しており、建物構造などは不明な点が多いが、人々の活動の場所であったと考えられる。

この様に任海宮田遺跡では、古代末期の断絶期間を挟み、12世紀後半以降15世紀代まで建物群の推移を見ることができる。それ以降の建物群は明かでないものの、一定量の遺物の出土はあり、近世段階の遺構・遺物も少なからずあることから、何らかの形で集落は存続していたものと考えられる。

中世における古環境の検討からは、イネの栽培が広く行なわれ、その他の有用植物の栽培も指摘されている。古代において建物群が確認されない調査地でも、中世以降の痕跡が残されていることから、より広範囲に開発の手が及び、集落を支える経済的な基盤となっていたと思われる。

こうした中世集落の形成やその後の展開には、先述したように宮河莊との関連が強いと考えられる。同様の性格と思われる遺跡も周辺に存在するが、任海宮田遺跡では建物規模や出土遺物の内容、さらに河川を利用した物資集散機能が含まれる点などから、こうした遺跡群の中でも重要な役割を担って

いた可能性がある。なお、神通川左岸側の道場Ⅰ遺跡も、宮河莊における莊園經營に関わりが深い性格であることが指摘されている（森2006）。半地下建物の存在などから、莊域内外の物資集散機能を有すると評価される。同遺跡では土器組成に占める八尾の比率は高く、任海宮田遺跡における河川隣接地区でも類似したあり方が確認できることも、任海宮田遺跡の性格の一端を示すものと考えられる。このことは、八尾の流通が宮河莊域内を主な対象としたとするならば、莊域内の各集落を有機的に繋ぐ端点となるような中核的集落、あるいは集落内的一部において、土器組成に占める八尾の比率が高くなるという特徴を有する可能性を示唆している。しかしながら、周辺遺跡や莊域外に所在する遺跡との比較検討がさらに必要と考えられ、これもまた今後の課題の一つとなろう。

以上の様に、任海宮田遺跡における古代から中近世にかけての様相を見てきた。これまでの報告を含めて、その主要な部分については一通り提示することが出来たと考えている。だが、その結果を咀嚼して、十分に考察を加えるには至らず、課題として残されたことも多い。今後、周辺遺跡での発掘調査の進展や成果によって得られる知見を合わせて、さらに検討を加えていく必要があろう。

（青山 晃）

参考文献

- 内田亜紀子 2005『1. 婦負における古代集落の様相』『中名V・VI遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団
- 宇野隆夫 1989「越中における手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 武田健次郎 1998『富山平野における遺跡群の展開』『富山考古学研究 紀要創刊号』富山県文化振興財団
- 武田健次郎 2006『6 大型掘立柱建物について』『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団
- 富山県教育委員会 1974『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 富山県文化振興財団 2006『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ－』
- 富山県文化振興財団 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ－』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 中野由紀子 2001『任海宮田遺跡の墨書き器について－B1地区出土資料の紹介－』『富山考古学研究 紀要第4号』富山県文化振興財団
- 森 隆 2006「越中八尾窯の流通に関する一様相」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会

2008（平成20年）年2月28日 印刷
2008（平成20年）年3月14日 発行

富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第39集

任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ

-公害防除特別土地改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ-

（第二分冊）

編集・発行 財團法人富山県文化振興財團
理 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL. 076-442-4229

印 刷 能 登 印 刷 株 式 会 社
〒939-8064 富山県富山市赤田761-1
TEL. 076-420-7030

